

劉雨珍 教授/刘雨珍 教授

南開大学外国語学院東亜文化研究センター 主任/南开大学外国语学院东亚文化研究中心 主任

日 時 : 2022 年 2 月 27 日 時 間 : 2022 年 2 月 27 日
場 所 : 南開大学日本研究院 地 点 : 南开大学日本研究院
使用言語 : 日本語 使用语言 : 日文
聞き手 : 野口裕子 采访者 : 野口裕子
(国際交流基金北京日本文化センター) (北京日本文化中心 (日本国際交流基金会))

【目次】

1. 研究者としての歩み
- (1)日本語学習と杭州大学の思い出
- (2)北京日本学研究センターの思い出
2. 研究の変遷について
3. 日本の研究者との交流
4. 中国の日本研究
- (1)中国の日本研究が貢献できること
- (2)日本語教育と日本研究の関係
- (3)今後の発展について
5. 最後に

【目录】

1. 研究者之路
- (1)学习日语, 回忆杭州大学时代
- (2)回忆北京日本学研究中心
2. 研究轨迹的变迁
3. 与日本学者的交流
4. 中国的日本研究
- (1)中国日本研究的贡献
- (2)日语教育与日本研究的关系
- (3)关于今后的发展
5. 写在最后

【本文】

1. 研究者としての歩み/研究者之路

(1)日本語学習と杭州大学の思い出/学习日语, 回忆杭州大学时代

私が生まれたのは、日本の方にとっては焼き物の景徳鎮とか廬山とかで有名な江西省の北東地方の、万年県という所です。そういうところでは基本的に日本語と関係がないんですけども、中国の文化大革命の特別な事情によりまして、私は高校に入って日本語を勉強し始めました。恩師の徐方啓先生は上海の方で、1972 年の中日国交正常化後にラジオ放送を聞きながら日本語を独学で勉強された。徐先生が江西省に下放されて、万年高校という現地ではトップの高校で 1979 年から日本語教育をスタートされた。私は 1980 年に万年高校に上がって、文系クラスで、英語ではなく日本語を勉強した。(日本語教育は) 失敗したら自分の首に関わる大問題ですから、徐先生は全ての力を尽くして教育してくださった。正直に言えば、後に大学に上がった時に、ほとんど大学 2 年生のレベルまで達していました。私は 82 年と 83 年、満 15 歳と 16 歳で 2 回大学を受験したんですが、両方とも合格しましたけれども、ただ当時は背が小さくてね、身体検査でのところで引っかかって、それで満 16 歳で杭州大学に入学したわけです。日本語の成績は 95 点で江西省トップでした。杭州は生まれた故郷に近いということもあって、また風光明媚な有名な都市ですから、そういう関係で杭州大学に入学したわけです。

徐先生はちょうど 80 年代に、中国の先駆者として創造学も勉強し始めた方で、我々への日本語教育は単なる語学教育であるばかりでなく、創造学も取り入れた、非常に先駆的なチャレンジでした。万年高校で 6 年間しか日本語を教えていなかったんですけども、結果は大成功。私以外に 20 数名の教え子が、例えば復旦大学とか上海外国語大学とか、北京師範大学、華東師範大学、広州外国語大学、武漢大学、山東大学、杭州大学などの名門大学の日本語科に進学しました。徐先生ご自身はその後江西省を離れて、江蘇省の常州というところにある創造学研究所に移りましたが、それから日本に留学されて、最終的には近畿大学経営学部の教授となられ、日本創造学会の会長や理事長も務められた、世界的に有名な創造学の権威になられた先生です。

杭州大学では、有名な先生で私と関わりの深い先生は王勇先生と王宝平先生であります。お二方は同級生で、82 年に卒業されたんですね。私は 83 年に入ったわけですけども、私が在学した時は、王勇先生は北京日本学研究中心の第一期生として入られて、直接 1 年担当していただいたのは王宝平先生です。今から考えてみると、やっぱり日本語だけじゃなくて、いろんな本を我々に勧めて、(和辻哲郎の)『風土』とかそういう日本関係の名著も、授業の時に紹介されて。だから単なる日本語教育ではなかったところが、後々の今の研究に影響していると。それから王勇先生ももちろん帰る時に我々に集中講義とかもされて、まだ日本文化研究所創立の前だったんで、いろいろ試行錯誤っていうか、我々に自分の考えを伝えながら、「これからこういうことやっていこう」みたいな話が聞けて、今としては懐かしいというか、非常にラッキーだったと思います。自分も北京日本学研究中心に進学したのも、やっぱり王勇先生がそこに入られたから。自分も 20 歳で大学を出ましたので、まだ非常に若い。当時、中国では大学院が少なかったわけですから、それで自然と北京の日本学研究中心に入ったわけです。

(2)北京日本学研究中心の思い出/回忆北京日本学研究中心

私が北京日本学研究中心(注:以下、「センター」)に入ったのは 87 年でありました。言語文学コースに入ったわけですけども、非常に超重要な先生が揃っておられて、具体的に言いますと、我々に日本語学を教えてくださいましたのは主任教授の林四郎先生、文学を教えてくださいましたのは中西進先生であります。ちなみに日本文化を担当されたのは芳賀徹先生という、日本人の方が聞いても全部、超重要だというふうにおっしゃっています。私の記憶ではですね、日本史と英語以外は全部日本人の先生でした。当時は言語・文学コースが 15 名と社会・文化コースが 15 名。言語・文学コースの必修授業は社会・文化コースにとって選択。社会・文化コースの必修はこっちの選択。割合自由にいろいろ授業が聞けたわけで、先生方の豊富な知識と熱意ですね、中国の学生にいろんな知識を伝えようとする、そういう熱意が非常に伝わってきました。

例えば中西先生は毎週のように読む本を勧めてくださって、いろいろ私なりに感想もかなり述べさせていただいたんですね。主任教授の林四郎先生も私のことをやっぱり可愛がってくださって、記憶では 88 年の夏休み、奥さんとともに山西省の旅行をされた時に、私は通訳をかねて同伴させていただきました。山西省は関羽の故郷ですね。永楽宮という、壁画で非常に有名なところも見学しました。奥様は切り紙が大好きで、いろいろ集めていらした。私にとって初めての山西省の旅でしたけれども、あの当時、授業だけでなく、いろんな意味で先生方と深い付き合いをさせていただきました。非常に収穫は多か

った、実り多いセンターの期間でした。まだキャンパスは（北京外国語大学の）西のキャンパスだったんですけどね。当時は今のビルじゃなくて、あの通りの向かい側にあったんですね。

学問的にもやっぱりかなり違いますね。それまで杭州大学の時は、静岡県から派遣された日本人の高校の先生が、3年生の時に、例えば日本の古典とかいろいろ教えてください、基礎のところはいろいろ勉強したんでしょうけれども、しかし学問自体はやっぱりセンターに入ってからです。林四郎先生と中西進先生も1年間教えていただきましたので、長い時間をかけてですね、体系的に教えてくださいましたわけですね。例えば、林四郎先生は（夏目漱石の）『夢十夜』を使って、いろいろ細かく文節まで区切っておられましたし、それからレポートを出すと林四郎先生は授業で細かくチェックされて、「これはこういうふうにするんですよ」ということですね。あと印象に残っているのは、中西先生が『万葉集』の講義を非常に熱意を持ってなされていました。またそれ以外の日本人の先生が来られる時にレクチャーもいろいろあったりして、やっぱりそれまでと全然違う学問的な雰囲気には浸っていました。

訪日研修で私たちが日本に到着したのは、今でも覚えているんですけども、1989年の2月18日だったんですね。日本ではちょうど昭和天皇が崩御されて、大喪の礼の真っ最中だったんです。ですから東京に1週間以上滞在しましたが、街中であまり人を見かけない。特殊な時期だったんですね。それから、交流基金の方がホテルとかでいろいろ世話してくださったんですけども、やっぱり外に出ると分からないところがあって、そうしたら道を尋ねるんですね。お巡りさんは「あの、いや、実は私もよく分からないんで」と、帽子からちょっと地図を取り出して、ここじゃないかと説明してくれた。地方から来たお巡りさんだと思います。そういうところが非常に印象に残っております。

2. 研究の変遷について/研究軌迹的变迁

私自身、『中日文学と文化交流史研究』という本(刘雨珍著《中日文学與文化交流史研究》江蘇人民出版社, 2019年)の中で五編に分けて、自分なりの研究を総括しているんですね。第一編は「万葉集と中国文学」ということです。これは中西先生の影響で、実は日本学センターの訪日研修の時も国際日本文化研究センターの方に中西先生の所へ行きまして、その研究をやっていました。

それから神戸大学（の修士課程）に行って、一海知義先生という陶淵明とか陸游とか河上肇とかの研究で有名な先生などに漢詩、漢文、漢学の薫陶を受けました。また藤原克己先生という源氏物語研究の権威の先生から平安文学と中国文学の比較研究などいろいろ教えていただきました。

博士の時は、黄遵憲という中国の近代の外交官で、明治10年から明治15年まで日本に駐在して『日本雑事詩』と『日本国志』を書いた中国近代の日本研究の先駆者とも言える、非常に優れた詩人ですけども、彼の研究をやっている時に、資料を収集する段階で「筆談」にたどり着いたわけですね。彼と当時の日本人の交流でやっぱり筆談は欠かせない。それで色々、早稲田大学とか国立国会図書館とかに行って収集したのが、筆談研究のきっかけになったんです。

筆談をやり出したら実は非常に奥の深い世界で、最初は単に交流の手段に過ぎないというふうにとらえたんですけども、実は筆談自身も研究に値する大きなテーマであります。筆談というのは、漢字文化圏、同じ漢字を使うのが前提ですね。東京でバスに乗ると、筆談筆具がある、という案内がございませうけれども、例えば中国人が日本に行って口では話が通じなくても、漢字で「新宿」という漢字を書けば運転手さんも分かる。それがそもそも筆談ということですね。実際、日本の『扶桑略記』という歴史

書によりますと、聖徳太子が小野妹子を派遣して中国で交流した時、湖南省の衡山というところで交流した時に、文字を箒で書いたという記録があります。ですから、やっぱり古くから、中国、日本だけじゃなくて、漢字文化圏の中の朝鮮半島の人も、琉球の人も、またベトナムの人も、実は筆談で通じるんですね。昔の人は、それなりの教育を受けていれば、文字を書いて通じる。それだけではない。文人であれば、まず漢字、それから漢文、それから漢詩という、その漢詩で交流するのが、文人の筆談の醍醐味かなと私は考えております。

実際、明治時代、例えば大久保利通でも西郷隆盛でも伊藤博文でも、みんな漢詩が書けたんですよ。昔の日本人も、朝鮮半島の人たちも、中国人も、教養として朱子学とか四書五経を勉強する。それから漢詩。まあ日本では『唐詩選』なんですけれども、そういうのがやっぱり常識だったんですね。

幕末の高崎藩藩主、大河内輝声という人は、廃藩置県以降、華族として悠々自適な生活を送って、もう毎日のように公使館を訪ねて、自分の詩をお見せする。私がいろいろ見つけたんですが、彼の詩は中国の古典を相当、典拠として使いたがる。陶淵明のいろんなことを入れたりとかして、多分、黄遵憲ら中国人から「お上手、うまい」と褒めていただいて、それで交流は更に深まる。昔の知識人、文人というのは詩を書くのがやっぱり教養だったわけですね。

私は2010年に、南開大学からの派遣で早稲田大学の招へい研究員として半年滞在したわけですが、早稲田大学にマイクロフィルムとか筆談の本物が残っているんですね。南開大学日本研究院の劉岳兵先生は、当時大東文化大学にポスドクとして滞在されていて、そこにも筆談の本物がたくさん残っている。ですから、劉岳兵先生を通じて、利用させていただいて、2冊の本（注：劉雨珍編校《清代首届驻日公使館員筆談資料汇编》（上下），天津人民出版社，2010年）を2010年12月に出したんですけれども、全部で七十四、五万字ぐらいあります。自分で翻刻作業をやったわけですから、それまで勉強したものが全部役に立っているというか、逆に筆談の解読ではいろんな知識が必要だなというふうに痛感させられた時もありました。

3. 日本の研究者との交流/与日本学者的交流

私は中日の文学と文化の交流が専門ですから、例えば、このコロナ禍の中で話題になった（長屋王の偈）「山川異域、風月同天（山川 域を異にすれど、風月 天を同じうす）」というのは、まさに心の通じ合う世界です。外交とか、そういうところなるとそれぞれやっぱり立場が違うところがあるかなと思いますけれども、私と日本の方の交流の中であまりそういうところは生じないのが現状ですね。むしろ日本人の先生にお世話になっていることが多いです。

中西進先生は日本学研究センター（日文研）の時の指導教師でもありますし、日文研に行ってからいろいろ教えていただいたし、日本留学に際して私の保証人でもありました。ですから、公私とも大変お世話になっておりまして、もちろん逆に私が留学で苦労した時に弱音を吐く対象でもあります。（北京日本学研究センターの訪日研修の際、）先生は非常にお忙しいんですから、直接いろんな話をするよりも何かあれば書いて置いておくという、コミュニケーションの取り方だったんですが、一時かなり苦しんでおりまして、私は自分で詩を書きました。それを中西先生の本棚とかに貼ってありました。（それを見て）中西先生は「まあ苦労しているね」みたいなことで、それからしばらくしてですね、こういう色紙をくださったわけですね。これは江戸時代の有名な広瀬淡窓という漢学者が書いた、日本では非常に有名な漢詩ですけども、意味は要するに「異国で苦労しているということを言うのをやめよう」

と。まあ、「志を同じくする人がおれば自ら親しいものだ」と。「暁に家を出てですね、君が水を汲んで私は薪を拾って、みんな一緒に頑張ろうじゃないか」という、非常に大きな励ましになりました。これはその時いただいたもので、私は大事に、ずっと、自分の座右に置いてあります。

今、中西先生は南開大学の客員教授としても招へいしておりますけれど、2012年私が南開大学で国際シンポジウムを主催した時も来てくださいました。また1996年中西先生が東アジア比較文化国際会議という中国と日本と韓国をまたぐ国際学術組織を創設されまして、私は今、その中国支部長を勤めておりまして、昨年11月にオンラインでしたけれども学術会議を無事に開催しました。中西先生にもオンラインで、90歳を今超えておられますけど、非常にお元気にお話をさせていただきました。

4. 中国の日本研究/中国的日本研究

(1) 中国の日本研究が貢献できること/中国日本研究的貢献

自分は中国人の学者として中国文学のとの関わりから一つの問題提起をするというところが重要だと思うんですね。例えば、『万葉集』の中の細かい考証もやりました。『万葉集』に「讃酒歌」（さけをほむるうた）という十三首がありますけども、その中の一首が、酒を飲まない人を見て「猿にも似てる」という、非常に難解な歌があって、どうしてこうなるかというのが理解できない方が多くて、私はこれは『史記』とか『漢書』とかに出典があるんじゃないかという綿密な考証研究をして、奈良の万葉古代学研究所の年報にも発表しています。これは学界で引用されたりとかして、それはまあ学者としてそれなりのことは当然だということか、もし間違っていればいろいろ反論すればいいわけです。

もちろん筆談も、正直に言えば、これ（注：《清代首届驻日公使馆员笔谈资料汇编》）も資料として利用価値が高いわけです。王宝平先生は『大河内文書』を影印出版した時に、序文で「伝世の作」と、非常に高い評価をしていただきました。（筆談の字は）崩しているから、一般の人はなかなか読めないんですね。読めないから、結局、解読した成果を利用されたりしています。もちろん、誰でもその資料を利用して、自分なりに解読していいわけです。僕としても、学問は天下のものって思っていますから、「學術乃天下之公器」と中国語では言いますよね。これから自分なりに更に解読を進めて、一つの課題としてここ何年間で仕上げたいと思いますね。

(2) 日本語教育と日本研究の関係/日语教育与日本研究的关系

日本研究と日本語教育ですね、正直に言えばこれは違うやり方なんですね。やっぱり中国と日本は交流の歴史が非常に長い。いろんな意味でその影響が深い。よく例として挙げるのは、例えば『万葉集』は、全部日本人が日本で作った歌のようですが、実は中国で作った歌も一首あるんです。山上憶良という遣唐少録が帰国に際して作った、「いざ子供早く日本（やまと）へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ」という歌は、世界で初めて外国で作られた和歌ですね。『古今集』巻九の最初の歌「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも」というのも中国の明州というところで詠まれた歌です。『万葉集』と『古今集』は日本を代表する歌集ですね。それで、中国で作られたものがあるというのは、世界で他に例を見ない。ですからそういう関係で、中国の日本研究の歴史が長い。日本の方はよく『魏志』倭人伝とか勉強されるんですけども、中国人から見てもこういう文化、文学の交流の歴史が長い。ほかに、例えば明の時代、倭寇対策として編纂された『日本考』における和歌と当時の民謡が全部で51首入っているんですが、それを私の指導している博士課程の学生に徹底的に調べさせているんですね。そういうところは、非常に特色のある研究になると思います。

一方、日本語教育というのは、私自身のこれまでのプロセスから言っても、中国が改革開放政策を取ってから外国との交流、特に日本との交流、その先進的な技術や管理方法などを取り入れたいというのが重点だと思います。外国語教育というのは、研究者よりもむしろ実用の人材として育てたいというのが80年代からずっと続いておりました。

私は日本から帰ってきて、南開大学に就職したわけですが、2011年に日本語文学コースの博士課程を作りました。外国語学院では日本語教育はもちろん大事ですけども、高学年、例えば3年生に上がると、こういう総合系の名門大学は日本語教育だけでは駄目です。南開大学の学生は優秀な学生が多いので、2、3年おきにN1で満点を取る学生が出てくるんですね。しかし、それで満足したら駄目ですよ。そこで南開大学は高学年で、例えば日本の言語、文学、文化、歴史、それから翻訳という5つの専門的な必修科目を設けた。全国を見て総合系大学はだんだん日本研究のレベルもアップしていると感じております。

日本語をある程度、1、2年生の時に基礎として勉強して、3年生からもう日本研究で資料を読むための一つの方法手段、としてやらないといけないと私は考えてます。実際、南開大学の日本研究院、歴史学院、文學院の修士課程と博士課程の学生たちが、私の大学院の授業を毎年聴講にきています。その授業では、現代日本語よりも、中国と日本の古典籍の読解、例えば和文の古典だけではなく漢文の訓読、それから崩し字、変体仮名や候文の解説も教えています。これは日本語教育であると同時に、研究者になるための必要な訓練でもあり、毎年いろんな素材を、違う素材を使って訓練しているんですけども、学生からはそれなりに好評をいただいております。

(3)今後の発展について/关于今后的发展

今、日本で学位を取って帰ってくる若い学生さんもかなり増えていきますので、それぞれ日本でマスターした専門知識を生かして、中国の専門的な人材を育てることが大事なと思うんですね。私たちの80年代の時は、正直に言えば全ての先生に学んだわけですね。国際交流基金も日本学研究センターでもかなり尽力されたんですけど、ここからこういう学者がだんだん育ってきて、それで自分たちで中国でまた学生を指導して、日本といろんな意味で交流しないとけない。私自身も今でも早稲田大学の招へい研究員をやっておりますし、國學院大學と毎年院生フォーラムをやっています。つい先週金沢大学ともオンラインでやっていました。東北大学ともいろいろ交流しております。我々日本から帰国した留学生も、日本との交流はすごく当然なことだと考えています。そういう切磋琢磨をしないと学問はもう伸びない。逆に言えば中国における日本研究のレベルもかなり上がってきていますので、日本の学者からもそれなりに認めていただいた。

今後は、日本研究が中国の全体的な学問体系の中にどれほど参入できるかという、これは実は大問題ですね。日本で博士号を取得されて帰ってきている人が多い。だけれども、今、南開大学をはじめとしてテニュアトラック、要するに南開大学では6年ですけれども、副教授まで昇進できなかつたらこれ以上滞在できないような、だからそのテニュアトラックみたいなのを得るためには、日本で受けた訓練に中国の他の学科のルールとか方法とかを取り入れてやらないと、生き延びていくのも大変かな、というのが感想ですね。だから私自身の学生の、特に博士課程の学生の論文テーマの選択に際しては、できるだけそういう文史哲、人文科学にわたるような指導をしております。でないと中国の学界になかなか参入できない可能性があります。

例えば今、湖南大学の宋丹さんは私の最初の博士課程の学生ですけれども、彼女は多分 40 歳足らずで教授に昇進できるだろうと思いますが、『紅樓夢』の日本語訳を研究して、すごく中国でいろいろ論文を発表しているんですね。早稲田大学に 1 年間交換留学をしたんですけれども、そのおかげで日本で林語堂の英訳『紅樓夢』原稿を発見されて、学界で大きな反響を引き起こしました。もう一人、今、武漢にある華中師範大学の占才成君は、日本の記紀神話と中国神話の比較をやっておりませんが、日本人の立場だけではなくて、中国における神話研究の成果も取り入れながら、やっぱり中国の科研プロジェクトも取得して、副教授とかそういうテニユアトラックももらって、どんどん伸びている。ですから、中国で科研プロジェクトとかを申請する時には、やっぱり主流の研究とズレないことを意識しないとイケない。そういうふうに、実は私も、周りの人にアドバイスをしているところです。

例えば筆談で言っても、やっぱり中国の学者は外に出ていかないと、そういう資料を手に入れにくいところがあって、入れても読めないところがあるんですね。一方、日本ではどうしても和文脈だけで考えるという傾向がありますので、中国に戻るならばやっぱり立体的に日本を見るようにしなくてはならない。それから僕はいつも言っているんですが、自分なりの核心的な競争力を持つように実力を高めていかないとイケない。どんな分野でも、自分はどンドンどンドン先の先に行く。それで中国に帰って自分なりの独特さを持ちながら、しかし全体的な学問の普遍性というところも見ないとイケない。日本はこれまでですね、細かいところすごく深入りをしている。もちろん学問というのは細分化しますので、そういうところも必要なんですけれども、しかし非常に大きなマクロ的な視点、他の学際的な視点も必要となります。私自身も北京日本学研究中心や国際日本文化研究センターなどいろんなところを見てきて、そういう学際的な研究がいかにか大事かというののが分かります。一つの視点しかないのならば、やっぱりちょっと全体像が見えてこない。今の若い学生は学位の取得のためにどうしても一つに集中しがちなんですけど、どンドン上に上がるともっと広い視野が必要かなというふうに実感していますね。

複製 編集を禁じます
禁止复制编辑文稿内容

5. 最後に/写在最后

一つだけ紹介させてください。私は 2017 年、日文研に滞在しておりました。ちょうど国際日本文化研究センターも創立 30 周年だったんですね。それで私はこういう詩を書きました。

(中国語で)

「敬贺日文研成立三十周年 刘雨珍
大枝山麓日文研，风雨洛西三十年。
秋叶满山如织锦，樱花遍地胜红毡。
五洲四海群英聚，和汉东西学问传。
虎跃龙腾今稷下，登高望远谱新篇。」

意味は要するに、「大枝山のふもとの日文研で、いろんな雨風とか——ちょうど詩を書いた時には激しい雨とか風があったんですけども——その 30 年の道はいろんな雨と風があった」。それで、次も景色を詠んでおりますが、「秋になると山は織錦のようで、非常に紅葉が綺麗ですし、春になると桜の花は絨毯のようで、一面に散っております。」で、次は自分の期待と自分の感想を述べていますけど、「五洲四海」というのは要するに世界各国から、群英が集まるということで、いろいろ学者が集まってきて、和漢で、東西で学問をどンドン次の世代へ伝えていくという意味です。次はですね、「虎とか龍

とかのように、みんな活躍している」わけで、この「稷下」というのは典故がありまして、中国の戦国時代の山東省にある一つの学問の中心地なんですね。それから高いところに登って遠いところを見てですね、新たな世界を切り開こうじゃないか、というのが私の期待ですね。この詩は今、日文研の所長室に飾ってあります。

実は、この詩を書いて思いがけない反応がありました。皆の前で披露したところ、台湾大学から来られた佐藤将之という日本人の教授がすごく興奮して、「劉先生、ぜひこの詩をください。私は午後、訓読いたします。」と言ってくれました。佐藤先生のご研究は荀子です。実は荀子はこの「稷下」で三回にわたって、要するに校長、学長を務めていた。だから彼の好きな典故だったんです。ですから、話は最初のところに戻りますが、やっぱり、筆談の時もそうですが、明治以前のものを見れば、すぐ何か集まると詩を書くのがもう自然の成り行きですから、これは今の日本人だけじゃなくて中国人にも言えるんですけど、そういう教養もやっぱりマスターして欲しいと言うのが、まあ私の最後に言いたいところなんです。

じゃあ訓読を読みますね。

「大枝山の麓の日文研、風雨洛西三十年。

秋葉 山に満ちて織錦の如く、桜花 地に遍きて紅氈に勝る。

五湖四海 群英聚まり、和漢東西 学問伝わる。

虎躍り龍騰り 今の稷下、高きに登りて遠きを望み 新編を譜さん。」

以上です。

公開：2023年6月21日

廣瀬淡窓『桂林莊雜詠諸生に示す・その二』

休道他郷多苦辛

同袍有友自相親

柴扉曉出霜如雪

君汲川流我拾薪